



婦女鑑
六

9
3924
6止



門口9
號3924
卷6



婦女鑑

卷六

目錄

肥二郎實平妻

鳥井與七郎妻

奥村助右衛門妻

山名禪高妻

細川忠興夫人

堀部金丸女

楚平伯羸

楊夫人

婦

鑑

卷六

目錄

〇一

宮内省

藏

藏

早稲田大學圖書館
昭和29.4.23
藏書

楊烈婦

韓氏女

蘭氏

盧妻妙惠

達涉夫人

葛羅周の妻

多勒梅兒

巴威畧の達涉

蘇瓦突堡の女侯

佛蘭格林の夫人

老婆龜

楚野辯女

齊女徐吾

哥爾涅利

侖屈維爾の女侯

綿多嫩

仁惠婦女社の看護人

加馬馬兒

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 命、御、女、等）

婦女鑑卷六

土肥二郎實平妻

土肥二郎實平の妻は。うまれはき才かしく。あはれ之ふあくして。めしはらふ婢僕まではねふる。話を法々てめぐるみけまは。みふ主のため。身を法としてつかへけり。頼朝伊豆の國へ兵をたおし、とた。東國の武士ども。おもひにほひおほき。志たふふ。實平始めはほごい。此舉いあら。あらむとためらひなるが。妻のすゝめふよりて。お

婦女鑑 卷之六

宮内省

ころをさだめ。そ此子遠平とも頼朝のみか
 たおまゐり。二心なく忠節をいたせり。かゝり
 ほとよ。頼朝大庭オホバが徒トカとたゝりひ。軍やぶきて實
 平とともに土肥の杉山ふかくれ。糧カシはきて殆オホクう
 るよのぞめ里。實平の妻豫アノカこれを察して。郎黨一
 人小髪を剃らせ。僧徒の姿よいでたゝせ。簀スガの中
 よ糧カシを充て。表ウラよい櫛シを折あけておき。杖かゝり。
 関ア伽カ桶ヲケよ酒をたゝへ。行者キヤウの花つむさるゝ。志
 のびゝ此びにおくりけき。杉山をとりまじた
 る大庭梶原が兵ども。たえてあやしまざりけり。

是よよりて頼朝主従うゑをまぬられ。間マヒをうか
 がひて杉山を遁ニゲまいでけり。妻また實平へせう
 そおして。三浦島山サヌケたゝかひのもやう。安房上
 總サウのかゝへ三浦の一族サヌケとたりし事まで。法ホウを
 らかよつげしらせぬ。頼朝の機を失ウシもす。安房上
 總サウへおしわたり。關東諸國をうちなびけ。法ホウひ小
 平家をほろぶし。海内をおづめし。其初をいへ
 るこれら此功キコウよよりてあり。

鳥井與七郎妻

鳥井與七郎の妻は。河合安藝守の妹なり。嫁して

後一とせふもみたざるふ。與七郎が主君淺倉義景。織田信長と戦ひて敗軍し。義景の同族式部大輔といふものゝ弒され。與七郎等三千餘の兵士を戦死しけり。その時織田氏の兵。山田城に亂入し。いと無狀事ども多かりける。中ふも與七郎の妻の年いとわらく。容姿殊に美しありければ。軍卒どもこれを捕へて。たはまたる事どもいひかくるを。腹たぐしきおとねもへど。あらがひふむありかりなむとねもへば。佯ておもてを和らげ。涙おぼらにひひけるやう。わらははる父

と夫とはみか刀根山ふく戦死し。母と姉といふのゆくへを知らず。されどなせよ存へくことおなすべけまば。我身比うへをもさおを心小かけたまふらめ。いまかゝるさまをも告げまらせたう侍まば。そを傳へたまはらば。此上なき高恩なり。此事うおへたまはらば。そ此後いともかうも君等の意は随ひまゐらせんとて。紙筆などおひをとめ。一通の書をたたくめをはり。やぶてあたり近き古井に身をなげたり。軍卒等愕きて何わたさしはせより。援けあげたまこと。事す

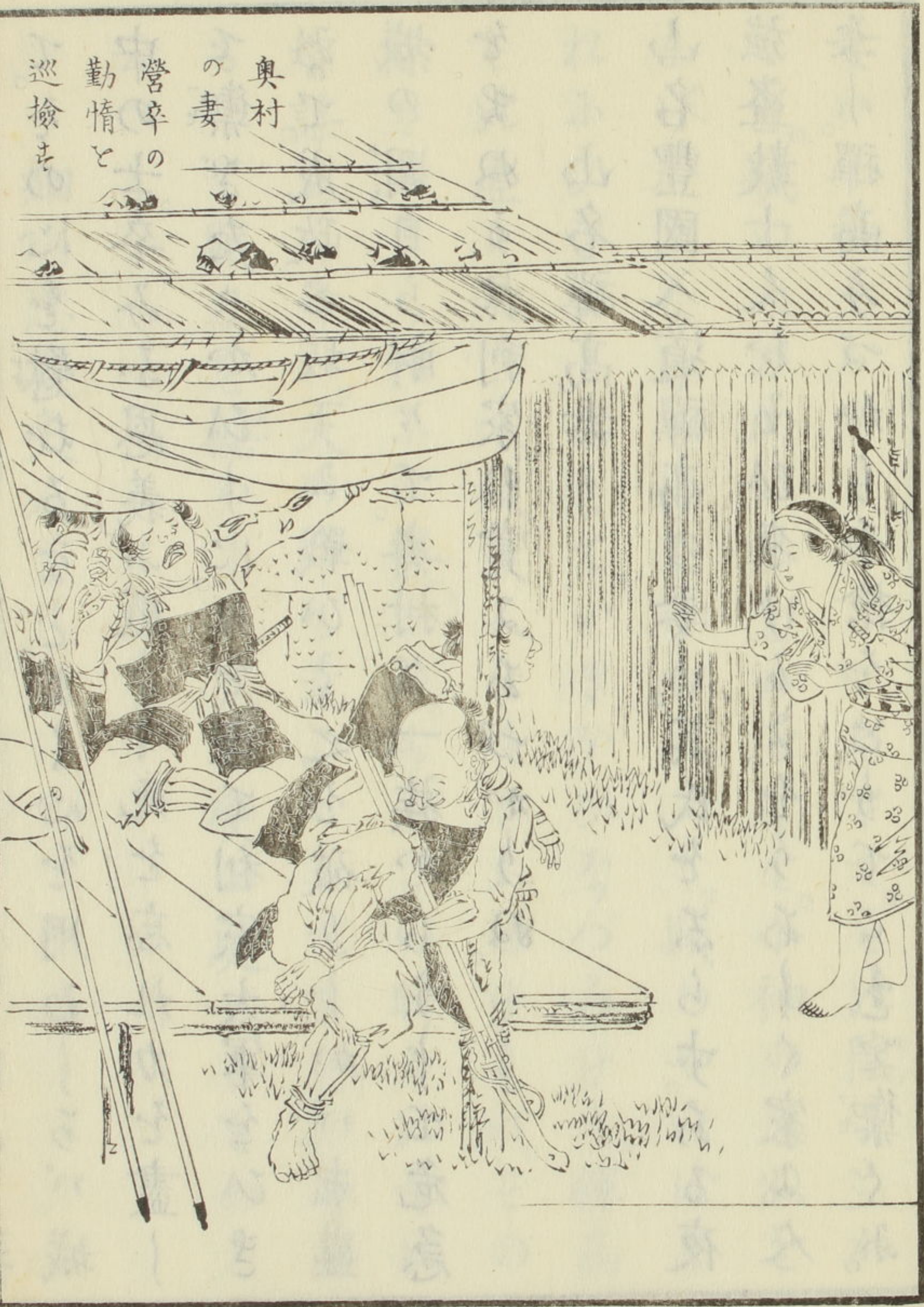
で小及むざれば。遺しおける書を開きておれを
見まは。末に一首の歌をどかき読けたる。よにふ
ればよふなき雲ぞおほふらんいざひりてま
山の端の月。猛き武士の心も和らぎて。人々鑑の
袖をうるふし。そ此貞烈を感トあつり。

奥村助右衛門妻

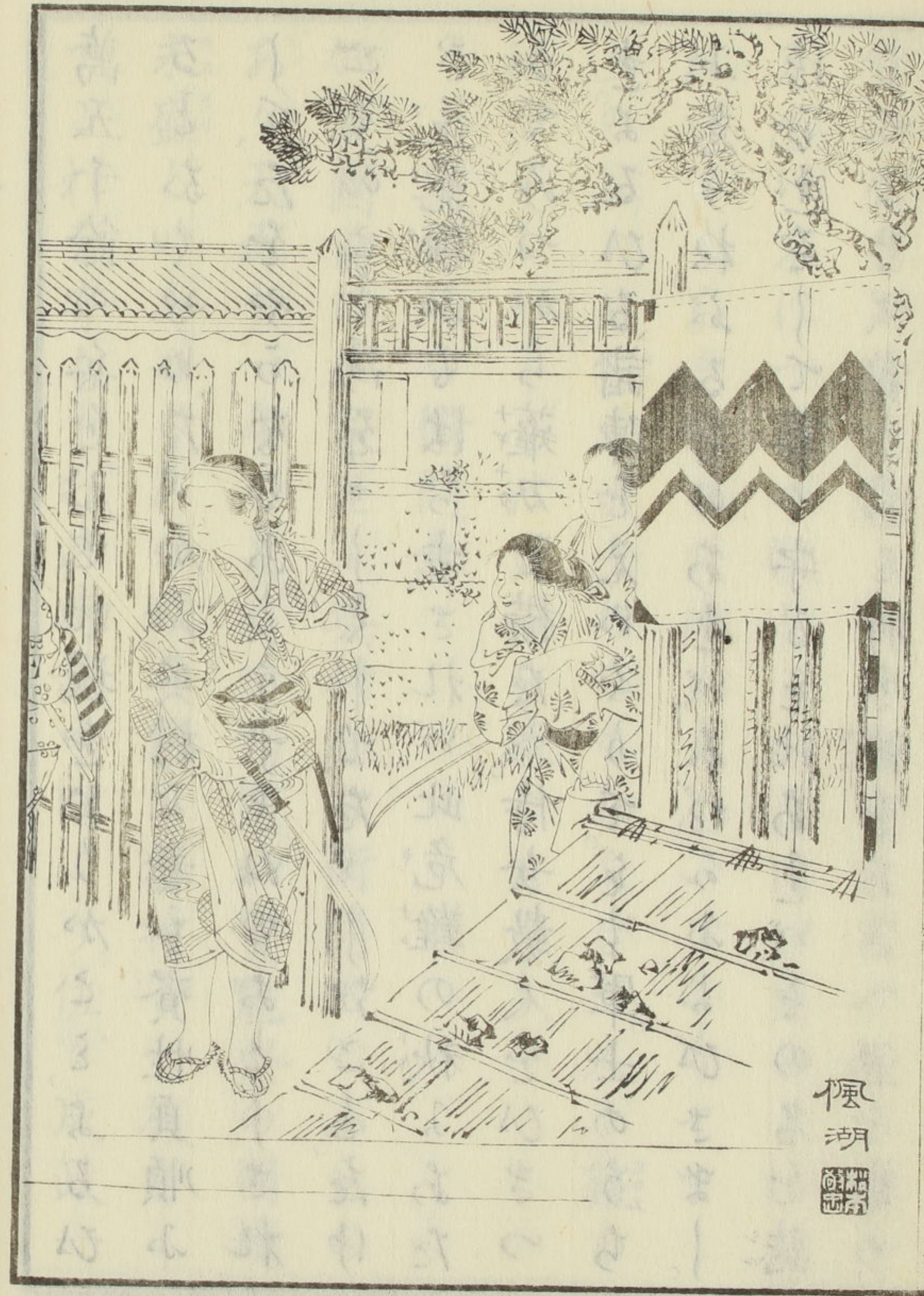
加賀國前田北家臣。奥村助右衛門といふもの
あり。天正十一年の夏。前田利家。加賀能登の國境
未盛といふところ。城を築き。奥村が一族を
てこれを守らしむ。此時越中國より。佐々成政一

萬五千餘の兵をめて。此城をとりかこむ。よるひ
るとおくせめた。かふ。奥村が妻を資性貞順ふ
し。たをやのなるおとうすぎぬのおと。され
どそのころ。海をくくして。たゞ。記こと。たけ
き益荒雄ふもはちす。されば此危難の秋。あた
りて。みづから薙刀を横たへ。侍女數人をひきつ
き。よるひる諸陣をえめぐりて。を。軍士のうち
小急りねぶるものあまは。あづのふよびさま。
は。のまを。して善く守るを此あまは。その名を誌
して。こま。賞。ある時。粥を。酒を。勸め

婦
女
鑑
卷
之
六
五
宮
内
省
藏



奥村の妻の勤惰と巡檢



婦
女
鑑
卷
之
六
五
宮
内
省
藏

楓湖

て。その心を慰むるなど。よく心を用ゐるは。城中の士卒みふ恩義を感じて死を忘れ。力を盡して禦ぎた。かひに。日を経て利家大軍をひきゐて。成政と坂下と戦ひ。之を破り。かば。末盛城の圍自ら解けて。奥村が一族からうけて危急をまぬられ。利家の賞とあづかりぬ。

山名禪高妻

山名豊國入道禪高の妻。其氏を志らず。ある夜強盗數十人おそひ來ける。をりあしく家より人なく。禪高みづから手槍をとりて。こまを禦ぐ。

妻は小袖をおかくかきいだきて。これ陰と立かく。賊の太刀かゝちをめぐらして。小袖のきぬをかげかゝちあげおけおける。小袖のきぬを。禪高れおひきまとはきて。いきおひをみけり。禪高を此虚と乗せて。賊數人をたきふせけまは。その餘ものこらばお散りぬ。もこの時を此妻は智謀あらず。夫の命も危ふかるべきを。即智をもつて賊刃を撓め。克く變と處せる。そのと云べし。

細川忠興夫人

越中守細川忠興の夫人惟任氏コノタケ。日向守光秀の三女ミヤノ。容貌殊コトよ。資性絶コトき。てか。こかりけり。天正七年の二月。嫁して忠興の夫人となせり。かくて同トキ十年の夏。光秀其主信長を弒コトせしにより。忠興これを惡みて夫人と婚を絶ち。三戸野の山中よおき。人を法けてまらせけり。いく子どもなく。山崎の戦。光秀、秀吉の爲よ亡がされて。法き従ふものもおとぐくうち死しけり。此時夫人のこコトとふあるもの自殺をすすめし。夫人いなびて曰く。いまよ良人の命あ

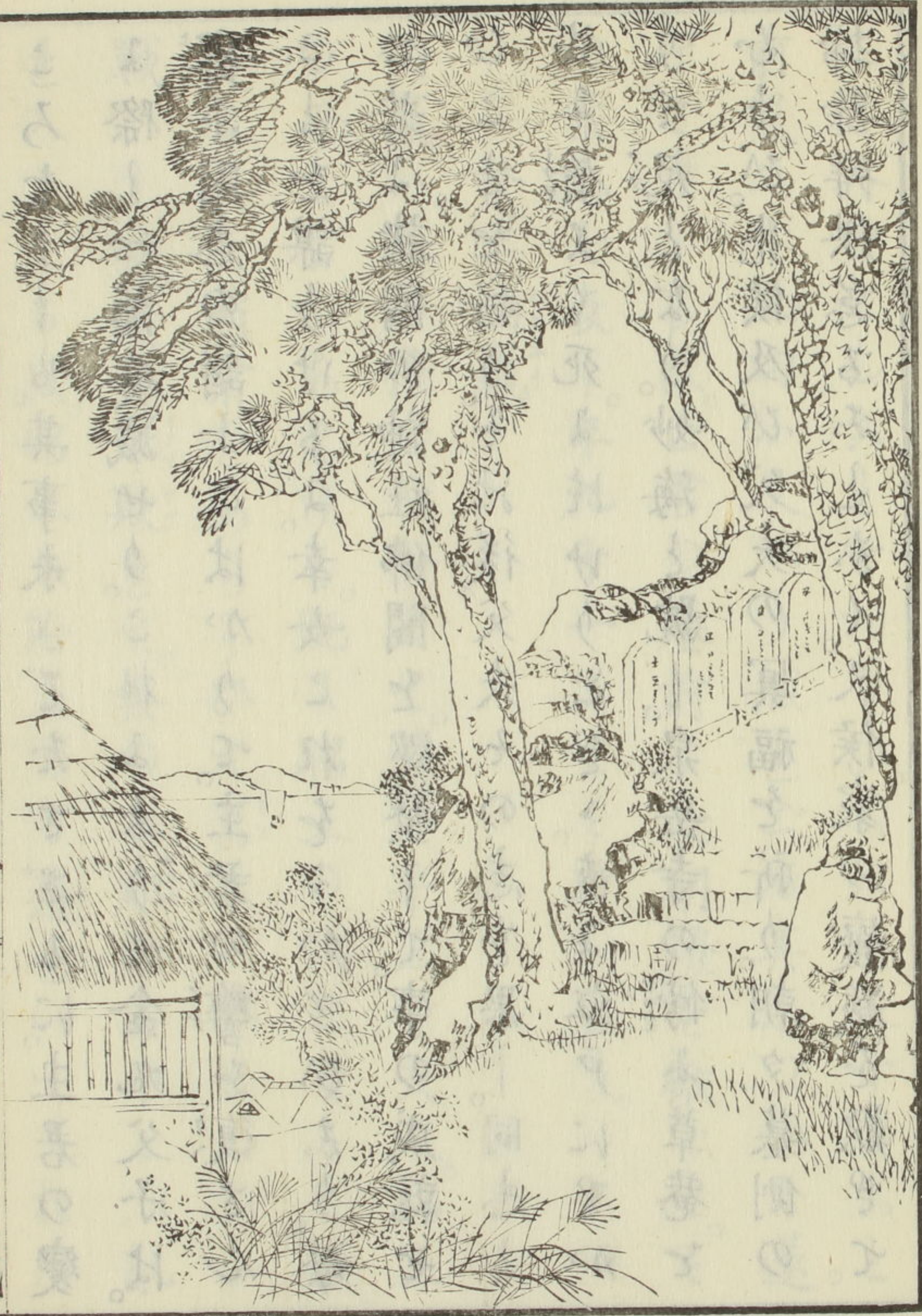
る。小あらず。いま自殺して身の屑クズよきを人ふあめさん。いと易きおとなれど。こをを貞節といふべからず。謹で夫の命あるを俟まちんよ。い志のトとて。年月をかさねその艱苦ふたへて。節を守りしかば。同き十二年の二月よいたり。秀吉其節操を感でこれを許し。忠興よ喻なぐさして故の如くぞをましめける。慶長五年。夫忠興い徳川氏よ従ひて關東よあまし。その年の七月よ。石田三成。豊臣氏の命を矯りて。事を向ぐる。小先だち。人を遣りて夫人を城中よむらとり。これを質しちとせん。

たもひ其由をいひわくまじり。此時家臣河北石見小笠原秀清などいふぞせましと。此事を夫人小きおえしに。夫人曰く。わが夫いまい東軍あり。わきこれよ背きて貞節を傷るふとあたもすとて。やがて令を家臣よ傳へて曰く。わき今自殺すれども。秀頼小負くよあらず。されば敵兵せめ來るとも。かならばこれ小弓をひくふとなられ。といひさとして。その後門を鎖さしめ。七首をとりて十歳の男子と八歳の女子とを刺し殺し。その身も又よ伏してまておけり。家臣等もこれを見

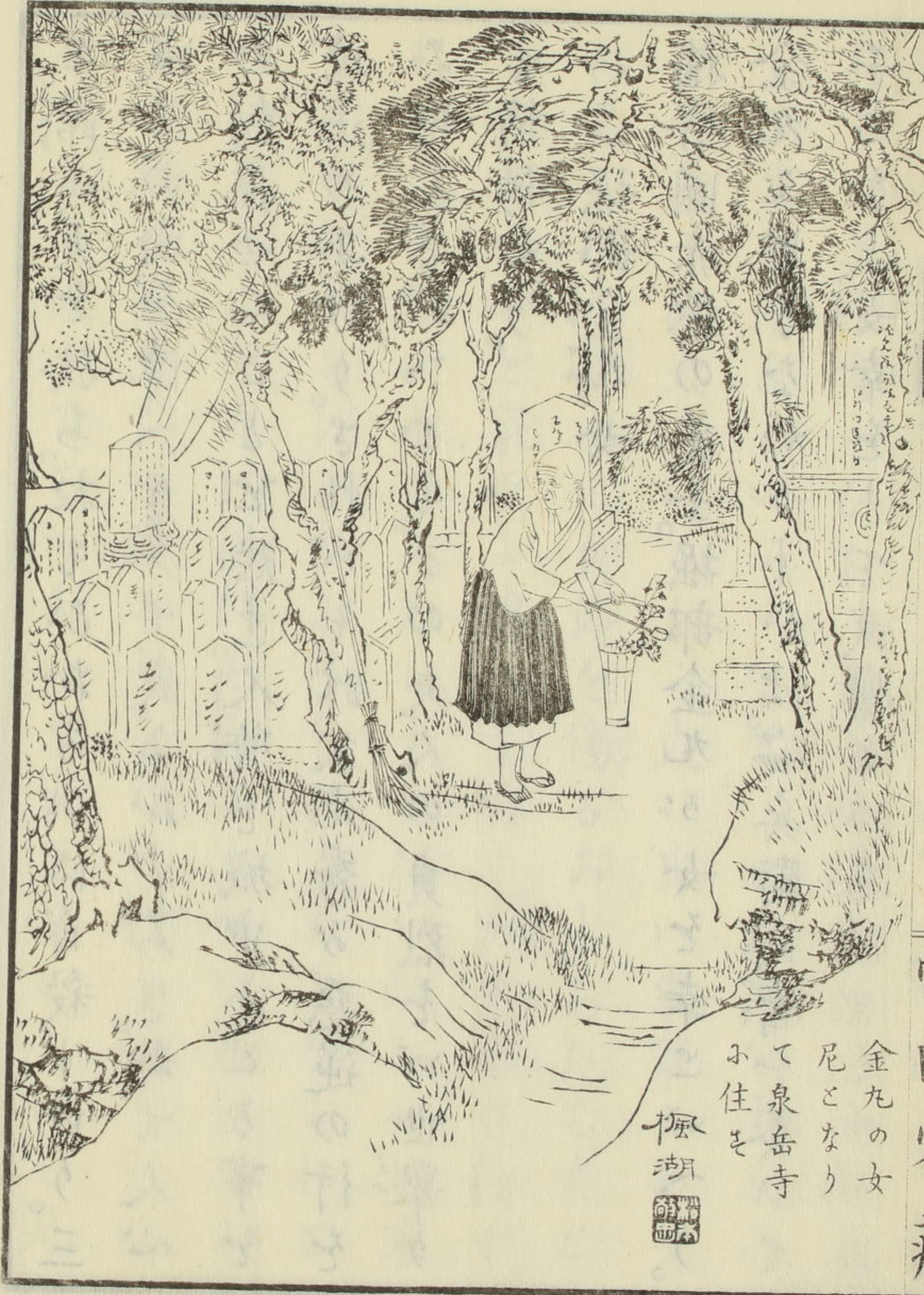
て。館タカ小火を放ち。たもひおもひに自殺しけり。三成この由を傳へきく。て大よおどろき。却て人心の動揺せんことを恐む。人質ヒトシテを城中おとる事をば止めおけり。されば此父光秀の悪逆の行をむ憎むといへども。この夫人の貞烈をば世舉りて稱揚せり。

堀部金丸女

播磨國赤穂の義士堀部金丸が女を幸といへり。金丸よ男子なかりしかば。安兵衛武庸ウケツネを養ひて子となし。女幸メカスをして武庸よめあはせんの下お



〇九



金丸の女
尼となり
て泉岳寺
小住さ

楓湖

ころなりしも。其事未だもたさざるに。主君の變
 じ際し。一藩廢滅せり。これよりて金丸父子は。
 密ヒソカ小同志の諸士とはかりて。主君の讐アゲを復カさん
 ことを謀りける。幸女これをうかゞひたり。母
 と共ト諸國の神社佛閣を巡歴して。事の成就せ
 むことを祈り。その後。父夫その志を果し。同志と
 共ト肩イサキよく死シはけりとき。直ナ江戶にまか
 りて。尼ニとなり。妙海と號し。泉岳寺の傍カサ小草菴と
 むまび。先侯及び父夫の冥福を祈り。朝夕墓側の
 掃除拜供怠るおとふく。又侯家の廢滅を歎きて。

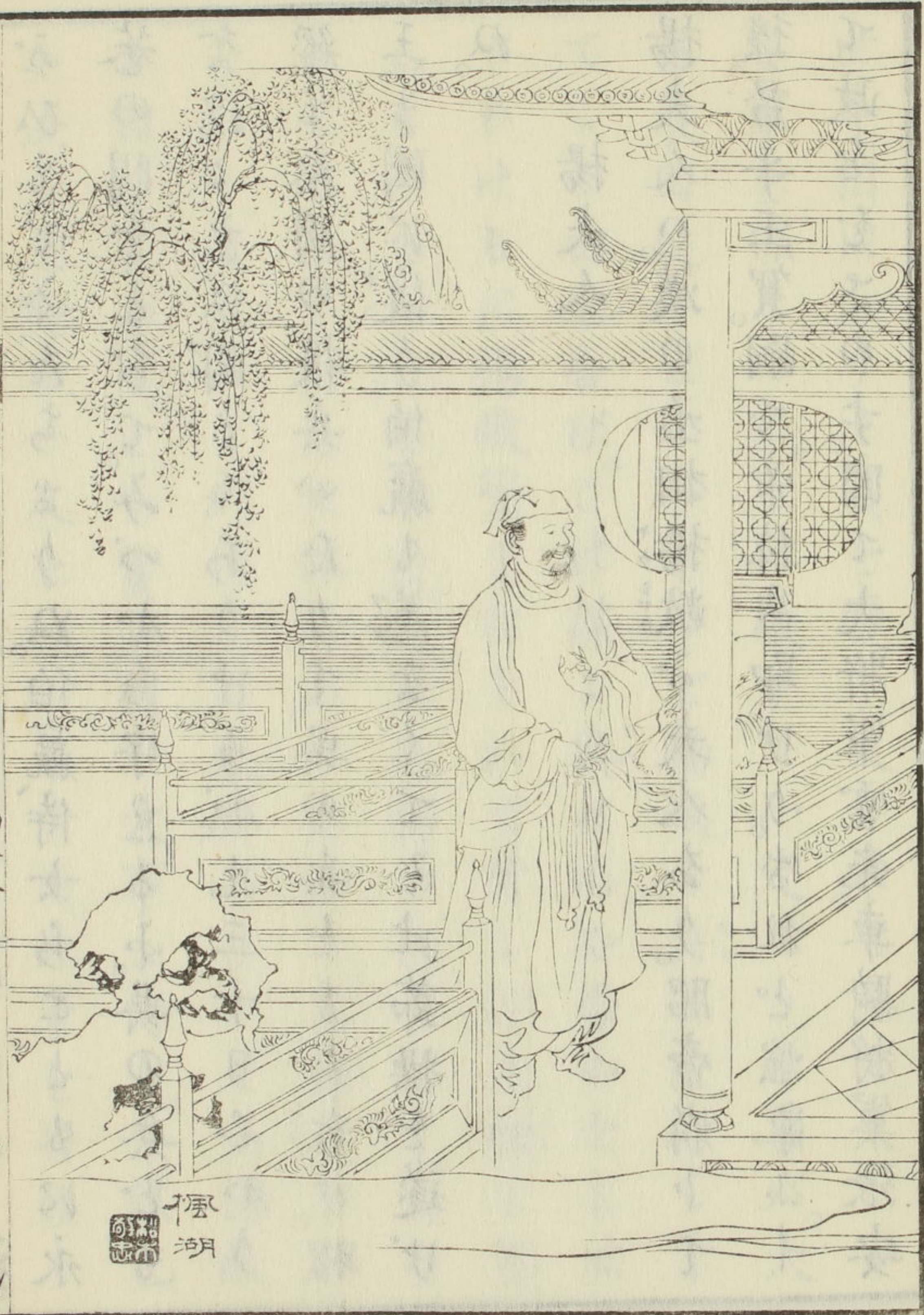
之を再興せんおとをねをひ。公に愁訴するおと
 前後二十五回小及びべり。然シカまども其志つひニ遂
 げざりしるば。亡君の墓前ニ長明燈を獻トて。そ
 の素志を表し。年九十一ニてまかきり。

楚平伯嬴

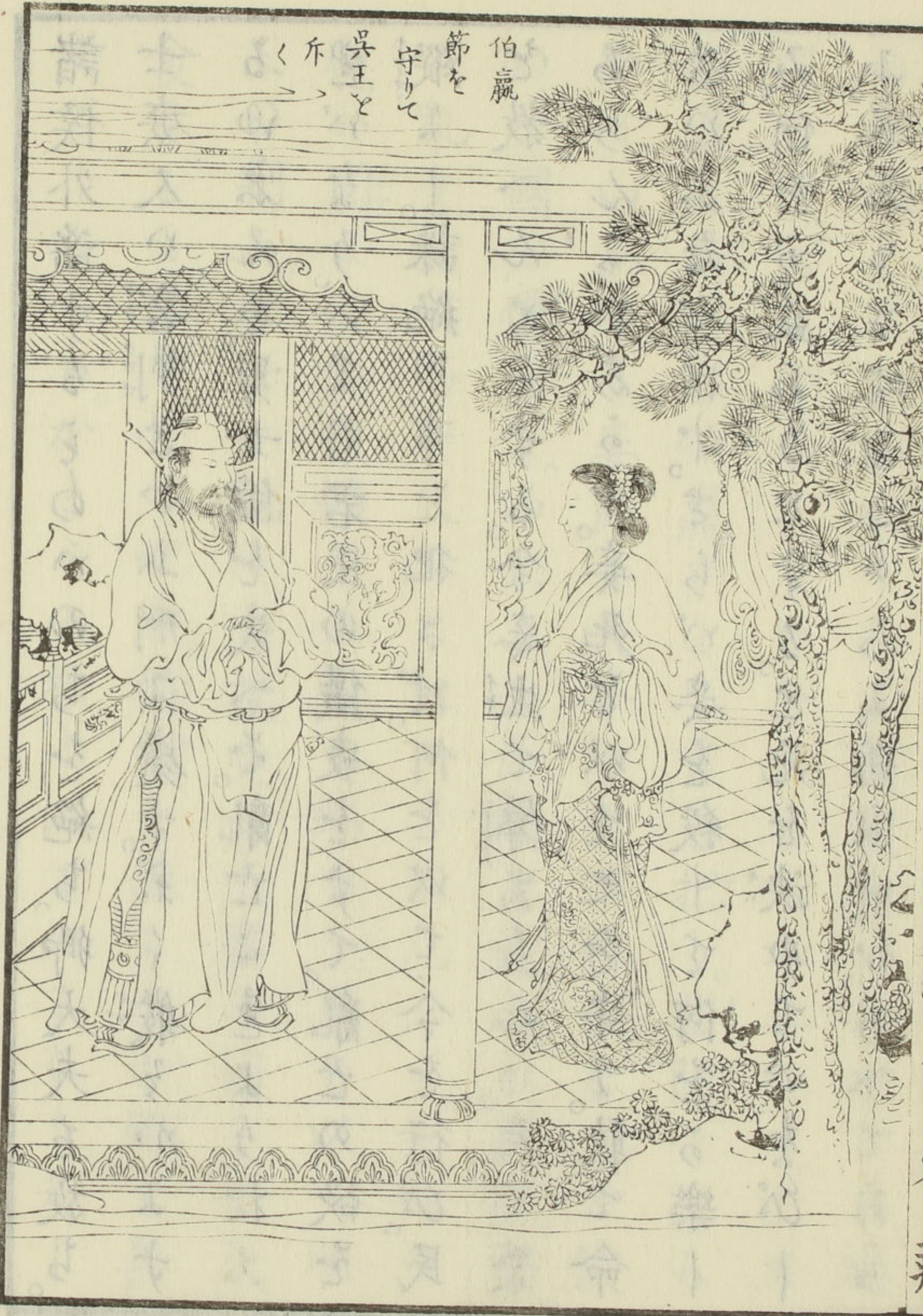
伯嬴イ。秦の穆公の女ニて。楚の平王の夫人。昭王
 の母ニなんありける。既シテ昭王の代となりて後。
 楚と吳と覇業をあらそひて。莒キョといふところ小
 戦ひし時。楚の軍敗ヤきて。吳の兵郢エイのみやこへ亂
 き入りしるば。昭王をからくも遁ノきいで。ねち

のびぬ。こゝにおいて吳王闔閭カツリョは、いまゝお昭
 王の後宮よりいり。宮人ををさめて妻妾と。次て
 伯嬴より薄きり。伯嬴手より七首を把り。闔閭カツリョはむら
 ひくいふやう。妾聞く天子の天下の表テホなり。公侯
 の一國の儀なり。ゆゑお天子制を失ふとき、天
 下亂き。諸侯節を失ふと、起り其國危ふ。夫婦の
 道の固コトより人倫の始め王教の端なり。是を以て明
 王の制。男女の親ら授受せず。席を同うせむ。
 食するも器を共よせむ。拋架イカを殊より。巾櫛キンシを異
 小せしむるを。かゝるお相とばざるなり。若し

諸侯外淫するもの、ちを絶ち。卿大夫を放ち。
 士庶人の宮割キョウワツといふ刑も處す。おく嚴オクをかよす
 るゆゑんを。男女倫を失へむ。亂亡にまよりにお
 せむなり。いま君君王の儀表をすて。亂亡の欲を
 縦タテマより。誅絶の事を犯さば。何を以て令を行ひ。民
 を教へんとする。今妾生イキて辱ハジカレあらん。死て榮
 あらん。よの志を以て之を守り。敢て命
 みの志たがはす。さらば妾を殺して何をの樂
 み。何をの益ありとする。と死を決めていなむ。
 小。吳王もさす。おらるゝと慙ハジカレぢけむ。あへてあら



〇十二



伯嬴 節を 守りて 吳王と 斥く

のひもせむたちさりぬ。伯嬴侍女らとともに永
菴の門をとちて。みづから守る小。呉の兵ども
なほさき城圍みてありけるが。凡三十日むかり
經て。秦國の援兵いたりて。呉の兵をうち斥け。昭
王も國に復り。伯嬴も恙なくて。此節操を遂げ
ぬ。

楊夫人

楊夫人の。漢の丞相楊敞の夫人あり。昭帝崩トテ
後。昌平王賀。嗣で帝位に即けり。されど淫亂ふ
て政ををさぬ。因て大將軍霍光。車騎將軍張安

世等。相はありて賀を廢し。更に帝を立て。天下の
安寧を保たんと。此議すべし。定まりけむ。大
司農田延年といふものを楊敞に許し。此か
てこの由を告げ。此謀を與せんや否やをと
しめけるに。楊敞驚き。これを背し。汗し。頓に答
ふる。おとろそねむ。延年恐怖の色を察し。去む
し。その坐をたちて休所ふいたれり。其隙をうか
ぶひて。夫人いそがはし。東廂よりいで。楊敞
に曰けるやう。ことを實に國の大事に侍り。今謀已
し決し。九卿の一人をつかして。此事を告げし

婦人鑑 卷之六 宮内省藏

のらる。君疾くこま小與こして同心せず。猶豫して決せざらむ。一命も危ふるべし。とす、むるをりしも。延年と此坐し復まじり。此時夫人直まこま小見えて。揚敞異議なく大將軍の教令を奉ずるよきを答へ。遂は共小昌邑王を廢して。宣帝を立る小至まじり。後いくなくして揚敞薨すけるよ。此時の功を賞して。封三千五百戸を増してたまはりたり。これ全く揚夫人の機を察てあやまざるの功よまじり。

揚烈婦

揚烈婦也。唐の李侃が妻なり。建中の季よあたりて。李希烈といふ之の起りて。陳州を襲ふの聞えたり。時よ李侃、項城の令よてあまけるが。禦ぎ戦はむと欲するも。城小よして兵寡けまじ。賊勢よ向まじりがさく。城を捨て、逃まむとせしに。妻楊氏いさめて曰く。君もいさくをすてば。誰ありて守るべき。義よたひく然るべからずといふ。李侃曰く。今兵少く財乏し。力を盡て支ふべからず。揚氏いさく。城を守をすてば。縣のみならず。賊地よいて。倉廩府庫よか彼等がものとならん。こ

土地人民を擧て賊と與ふるなり。志ありて今我
 こをを用ゐば。それ百姓いさか戦士あり。賞と重
 くして死士を募らば。かかこの難を濟ふべし。と
 理より正しくいさむるふ。李侃こを小従ひ。のち
 吏民を徴して庭中小いれ。相與して死を以て守る
 べしといへば。こを此忠節と感してこれを諾
 ひけり。李侃たちまち數百人の戦士を得。こをと
 率て城を守り。揚氏を自ら擧て兵士と給せり。
 かくて李侃賊箭と中りて退くを。揚氏責て曰く。
 君いまならずば。誰のよくこの城を固守をべき。

傷を被りて外に死するの榮い。牀ふありて死す
 るよの愈りぬべし。とはかまらば。李侃復び
 城に登りて賊とたかひ。敵を射るふと夥しく。
 賊遂に志を果さずひき退き。縣の卒と保つこと
 を得ぬ。こをより揚氏を揚烈婦とぞ稱しける。

韓氏女

宋の希孟韓氏い。巴陵といふところの生きたり。
 或は韓魏公琦といへるふ五世の孫女なりとい
 ふ。をさあきと記より聰明ありて。善く書を讀
 ならへり。後襄陽の賈瓊といへるふ妻とあり。

婦人鑑 卷之六 〇十五

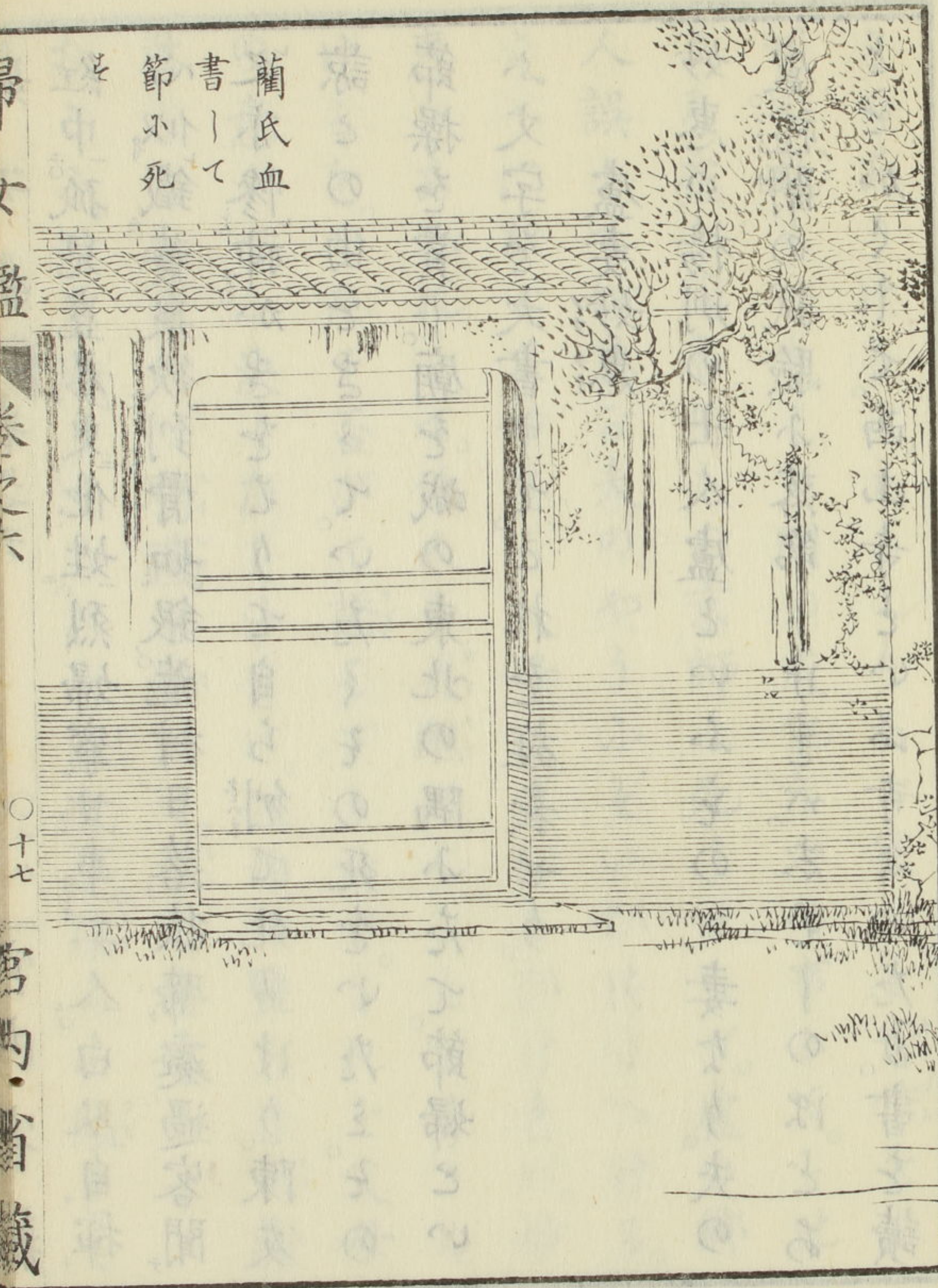
貞實ふしてよくつかへたり。かくて開慶元年といへるとし。元の兵。巴陵を破りて襲來せし時。敵兵よ捕へられたり。希孟この時僅るよ十八歳なりしを。兵卒等ひそかよはりて。主將よ獻ト恩賞よ與らんとおもへり。希孟を此逃まらたきを。しり。ひそか小詩を作り。かきふるして帶中よ匿し。水よ入て死よけり。後三日を経て。兵卒等その屍を得てこまを檢るふこの詩あり。曰く。我質本瑚璉。宗廟供蘋蘩。一朝嬰禍難。失身戎馬間。寧當血刃死。不作衽席完。漢上有王猛。江南無謝安。長號

赴洪流。激烈摧心肝。とありけむ。これをこるもの。を此貞烈を感せぬをなかりけり。

蘭氏

蘭氏ハ。蘭人の女なり。明の初。陳友諒の部屬なる鄧平章といふとの。江西を陥いせし時。蘭氏の容貌のいと清らなるふめで。その幼兒を併せてこまを奪掠せり。蘭氏つひよ歸ること何たをぬをはりて。間をうかひ。陰にをさかむをさし。ころし。指を嚙みて血を以だし。壁小詩一律を題せり。其詩よ曰く。涇渭難分濁與清。此身不幸厄

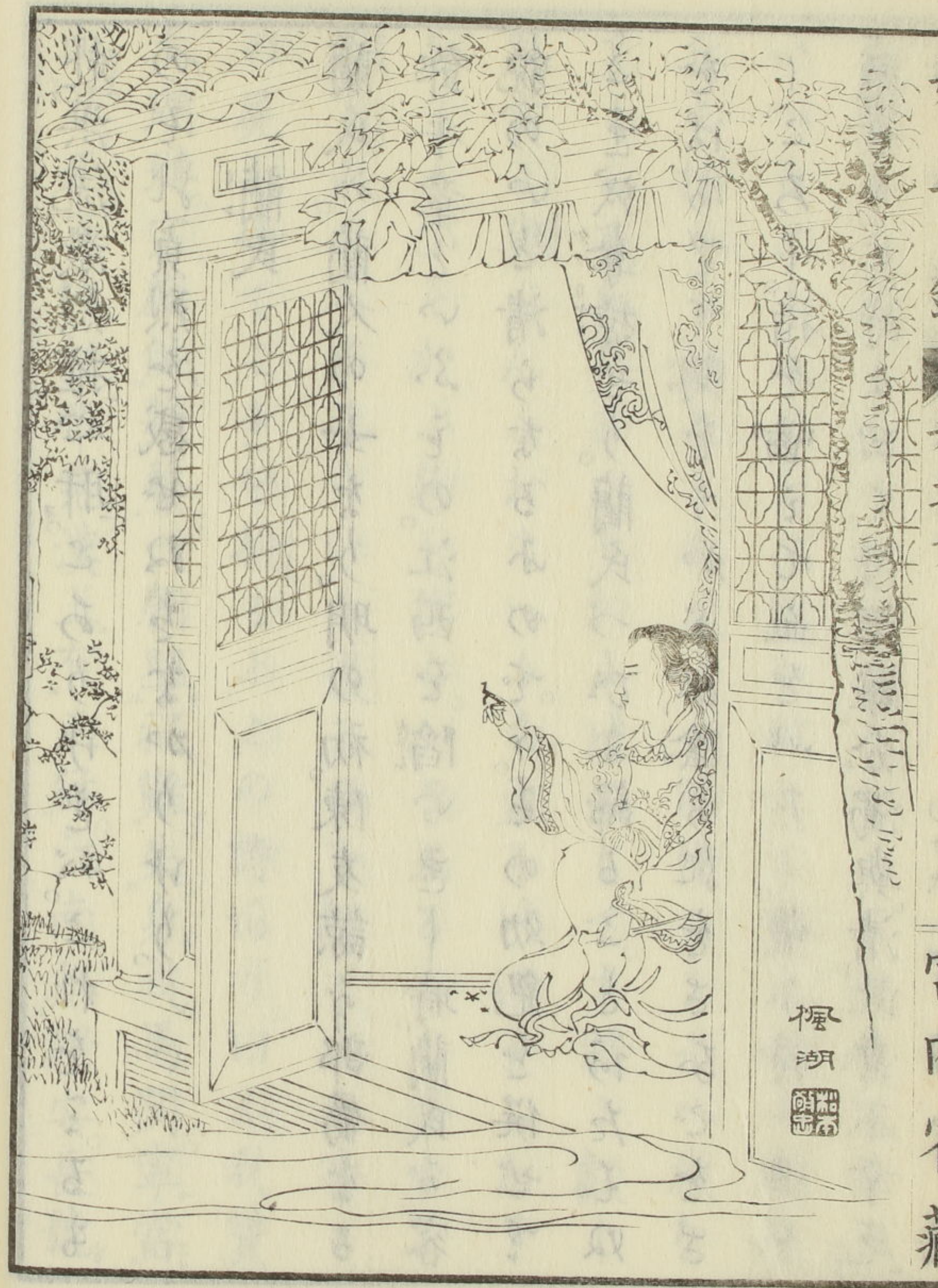
婦
女
鑑
卷之六



〇十七

宮内省藏

婦
女
鑑
卷之六



宮内省藏

紅巾孤兒豈忍更他姓。烈婦寧甘事二人。白刃自揮心似鐵。黃泉欲到骨如銀。荒村日落猿啼處。過客聞之亦慘神。かきをとりて自ら刎て死にけり。陳友諒この由をきいて。いたくその死をいたし。その節操を賞し。廟を城の東北の隅にたて。節婦といふ文字を大書して。これを旌表せり。

盧妻妙惠

妙惠ハ揚州の士人盧といふもの、妻なり。夫の盧禮闈の試験小落第しけむ。志むしのほどあつとをかくして。西山寺といふ寺にいたり。書を読

みてありける。もとよりわが家も音信をきせて過しけり。こゝに明の成化年中の事あり。を此ころ盧と同名のもの京師に死しける。盧の郷人誤りて妙惠が夫のやうにぞいひはさへける。こゝにわいて妙惠が父母も。さおもひけむ。妙惠をあむれむ。他人に再醮せんことをきかぬ。けるを。かたく否びて諾むざりけり。されど父母の意す。て決たりけむ。江西の鹽あき人謝啓といふもの、聘禮を納れて。強て再嫁をす。むる。妙惠陽りてこれを諾まひ。陰に小縊きて

死ふんとしけるおとたびくなりしも。いつも人
よみとめられて。そ此志をたたまふとあさまず。
志ひらきて遂に謝啓が許しゆきけり。されど節
を守りて梗く従そねむ。謝啓もすべなくて。おの
お母の傍ををらしめをを安め。やうくお
ちつけむとしけり。こ此謝啓お母も素と揚州の
生れかりたまひ。その志るべよよりて。懇に尼と
ならんことを請ひしに。その母わざとこれをう
べふひ。舟よのりて江西に歸らんとするよ先ち
て。謝啓が舟。金山寺といふところを過るころ。妙

恵る乗せる舟何とよりいたりけむ。そ此志も
むふしくなりぬ。此時妙恵壁に一首の詩をのた
はけし。その詩よひまぐ。一自當年拆鳳凰。至今
魚鴈兩茫茫。蓋棺不作橫金婦。入地還從折桂郎。彭
澤曉煙歸宿夢。瀟湘夜雨斷愁腸。新詩謾寫金山寺。
高挂雲帆過豫章。その後、揚州盧穿妻李氏題。と
ぞかきつけたる。そ此ぶら盧學問成りて及第し。
官に登庸せられ。公用よて江西にいたり。事よて
く揚州の家よかへりし。人だふをまふさかりお
けり。かくてある日。金山寺よあそびて。そからす

妙惠の詩を見。あやしくなるら路を豫章のた
もとりてゆきけるふ。鹽あきなふ船よての詩
を唱ふものあるをきく。そとくるべよて妙惠の
ありかをしり。やぶて公の館よま祈きて相まこ
え。ともよよろこびて初め此ごとくぞらけ
る。

達渉夫人

達渉ダツチエスハ。法蘭西の巴嫩バイン公の夫人なり。一千五百八
十八年のころ。巴嫩公を沙透坦哥シャトールタンゴ臨の城守よて
あましる。リーグリイグ名天主教徒の名同の頭領等うらむ

るおとけりて。こまに滅がさんことと企て。政府
よ讒言せしむは。政府ハ之を信し。捕吏を發して
城よ遣り。公を捕縛せんとせしむ。公ハ此事を偵
ひ知り。塹ホリを浚フカうし。壘ウイを嵩タカうして禦フセぎしむ。捕
吏等容易く入るおととえず。因て策カキゴトを設けて。其
夫人達渉ダツチエスを執トウへ。之を縛りて城門の前よ置き。急
よ城を攻しむ。彈丸雨の如く注ぎて。達渉ダツチエスの一
命いと危ふし。此時これよ従へるもの一人を彈
丸の爲ようち殺させ。一人を重傷を負へり。か
る死地小在りたるがら。達渉ダツチエスハ毫イサカも臆オクする色なし。

敵軍の者どもこれよ逼りて。早く夫よ降服を勸めよ。然らざれば一命を絶んと脅迫しけむ。則ち答ふるやう。吾を夫の名譽と安全の爲ならん。一命を棄るも猶惜む不足らず。然るをいふでかこれよ勸めて。卑怯の所業を爲さしめん。吾はわが夫を亡ぼして不義の富貴を受けんより。寧ろ夫の爲よ死おんのと。といひおち。手を舉て公の方よ向ひ呼そりける也。良人妾の身の安危よ拘りて。志を挫くこと勿也。願そくも妾の遺骸を以て壘壁となし。更よ快く一戦せよ。妾の生死榮

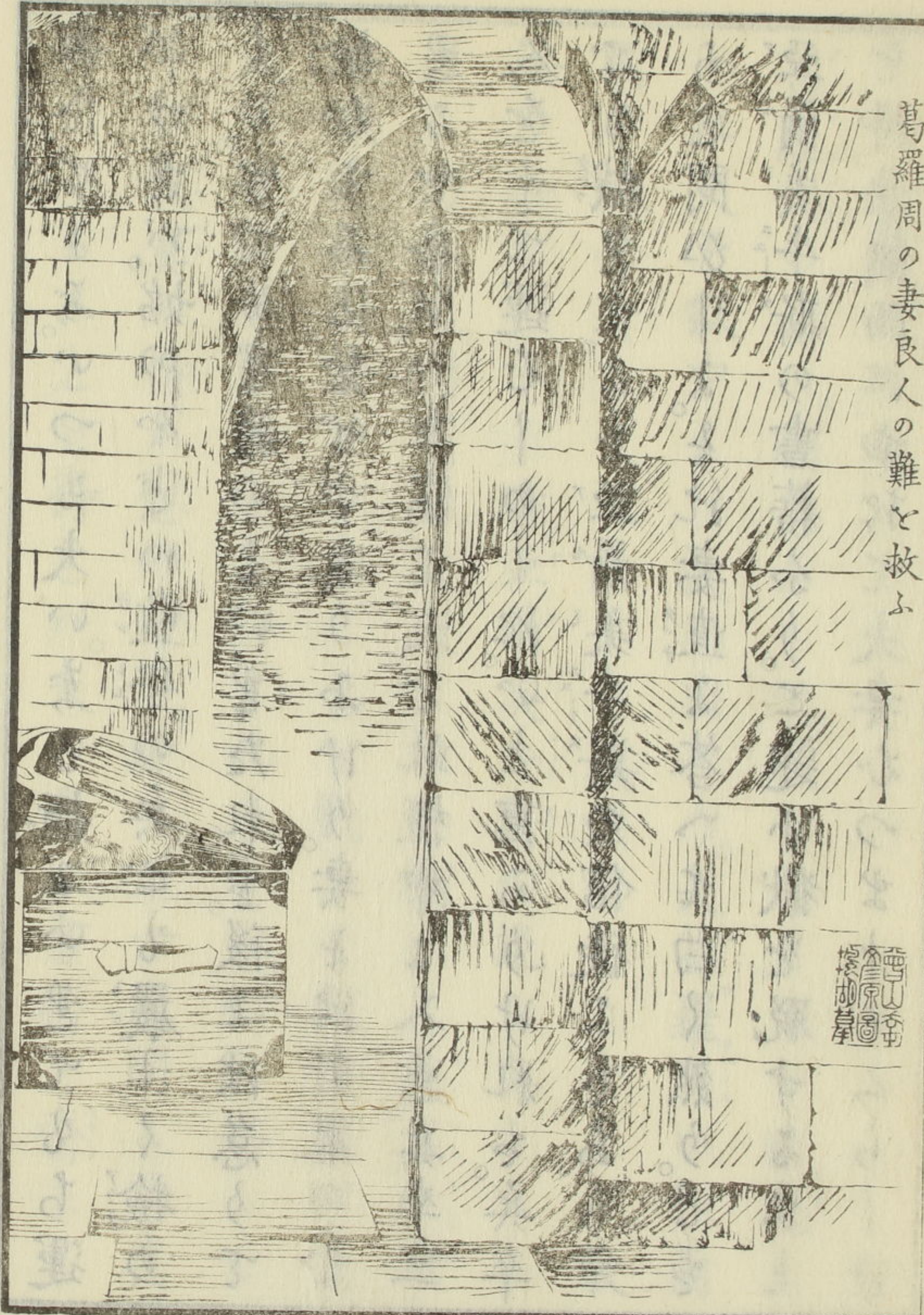
辱は一よ良人の身よ係せり。良人死なむ妾も亦死んのと。唯願そくも良人永く存らへて。妾の死後を弔らへ。若し然らんよ。妾の幸福何ものおき小若ん。といとも屑よく述べけむ。敵軍等そ此節操の鞏き小感す。之を殺す小忍びず。兵鋒爲よ挫け。暫し猶豫らひくありける中。公をそからず朋友の助け小より。其冤枉を伸ぶるおとを得ぬ。是よ於て達涉ぶ喜ひとかたからん。城門の関くもまたで踊躍して梯子を攀ち。城中よ入りてその夫よ見え。互よ安全を祝しけり。

婦
女
鍾
卷
之
六
〇
二
一
宮
内
省
藏

葛羅周の妻ハ。剛勇ホシテ。敏智アリ。若ク
此夫を獄中ヨリ救ヒ出セリ。夫葛羅周ハ和蘭
國の神學者ニテ。有名ナル教法師ナリケルバ。教
法の争ヒアリ。一時。亞爾美牛斯の説ニ與ヒ志シ
罪ニ由リテ。同國の政府これヲ捕ヘ。盧黒士典
の城中小囚禁セリ。妻此を歎キテ獄中にイリ。
夫ヨリ看侍スルホトヲ許サレケルバ。心を竭シテ
その寂寞の情ヲ慰メケリ。かくテ一周間ニ兩度
外出スルホトヲ得ルバ。夫の爲ニ書籍ヲ齎シテ

出入ゼシ。いつも大いなる櫃ヒツにいきてもち運
びけり。始のやどハ監守の兵ども嚴しく檢め
し。いつも書籍のといをたれを。後には急りて
檢むるおとをせずなり。おけり。妻と此計畧のな
るを喜び。一日竊る夫を此櫃中ニ入せ。兵卒ニ
人をして運むしめしに。いと重なりければ。兵卒
ども戯れて。これを亞爾美牛斯の信徒もあら。ト
いと問ひし。これ妻直る答へて曰く然り。これを
亞爾美牛斯の書籍なり。と遂小獄を脱するおと
を得。法蘭西にわたつて夫妻むつまつくらけ

葛羅周の妻良人の難と救ふ



會山香
繪



〇二二三

り。

多勒梅兒

多勒梅兒の豪邁節烈の婦人なり。罕なる大功を顯はせり。その英國內亂の時。巴力門の徒脅迫して降服をすゝめしかば。これに答て曰く。妾夫を托せられて此家を保守せり。夫の命令ある所何らず。えこそ降るまじけき。且妾の身よいかをらず。神の助け有るべければ。さらにおそるゝおとなし。と斷言して家を守り。防禦小力を竭し。かく月を累ねて防戦せしむ。就中三箇月のや

ども緊しく敵兵小圍まれ。砲丸雨の注ぐが如くなり。さらにおそるゝ色なく。禦ぎさへてこれに勝へ。遂に國王の援兵を得て圍を解き。この危難を免れぬ。

巴威畧の達涉

達涉の巴威畧公傑爾弗の夫人なり。傑爾弗。徳逸帝根拉德第三世と兵を構へ。物嫩士堡の城中に圍まれ。力を竭して禦ぎたり。このふおとあまゝ。びなり。かど。衆寡敵するおとあまゝ。遂に降旗を樹て。公の城中より帝の陣に使を

遣^シて。授^シ城^ノの條約を締^ムむ^レめ^ルなり。此時德逸
帝ハ此使節を遇^スる^ルおと極めて厚く。且^シこ^ノを
小いひ^ルる^ルを。公宜く兵を率^テ余^ガ陣中を經過
せよ。余^ガ兵決^シて害を加^ヘざる^ベい^ハひ^レね
え^ルけ^ル小^ノ夫人達涉^ヲ之を信^ゼざる^ベい^ハひ^レね
謀^ハあらん^ルおとを疑^ヒ。乃ち復^タ人を遣^リてい^ハひ^レめ
ける^ルを。城中の婦人^ヲを盡^ク導^者を給^フ。ま^ニ婦
人等躬^ヲら携^テふる^ル所^ノの^レの^レい^ハひ^レめ^ル之^ヲを賜
ひ^テ。隨意^ニ帶^テ去^セむ^ベい^ハと陳^ベね^レば。帝ハ
異議^ナく^シ之^ヲを許諾^セり。斯^テ德逸の軍隊ハ。婦人

等の城中より出るを觀んと。相望んで待ける^小。
婦人等各その夫を抱負^シ。達涉^ヲを先^ニた^テ。貴女
花羅涅斯^等相踵^テ出來^セば。案^小違^ヒ驚^キけ
り。初^メ帝ハ達涉^ノの乞^フ所^ハ。ひとり金銀寶玉の
類^ヲならんとおも^ヘり^シ。この狀を^シる^ル小^及て。
始めて婦人の術中^ニ小^陥り^シを覺^カり^シかど。深く
婦人の貞實^ヲして。其夫を愛^スる^ルこと金銀寶玉
に勝^タると賞^シ。悉^ク城中の人を釋^ス去^ラし^メ
たり。

蘇瓦突堡の女侯

婦人 蘇瓦突堡の女侯 〇二十五 名 省 蔵

慕爾別克の戦の後、徳逸の將軍亞伯侯、皇帝甲列第五世の軍戎帥ゐて、都連水を経過し、蘇瓦突堡女侯の領地よいたきり、女侯、兵士等の掠奪を恣ホシませんおとせおそれ、豫め徳逸帝よ請ひく。兵士の土地人民よ妨害を加へざらんことと約し、別小酒肉を設けて、大小徳逸の軍と犒ホシさんと比。さて此通路撒爾河よ架せる橋を、女侯の居城に接近すれば、之を毀ちて、更小市街とほきとらるお架し。兵士をして劫掠の念慮を生ぜざらしめんこととせとめたり。されど猶おの軍の經過す

る路傍の人民を、兵士の劫掠をおそれ、女侯の許しとえく。資財重寶をば城中よ搬致して、安全を保たんことと請へり。かくて徳逸の將軍亞伯侯を、西班牙及徳逸の大軍を帥ゐて、不倫瑞克公、及そ此二公子と共に、使を女侯の許よ馳せて、その響應よ與らんことと請ひたり。女侯を豫め期したるおとなれば、その來意を諾し、且向よ徳逸帝より得るところの保證を述べく。之を兵士よ傳へんこととせいひねくりけり。既ふして亞伯侯を不倫瑞克公の父子三人とともふ。女侯の城よ來

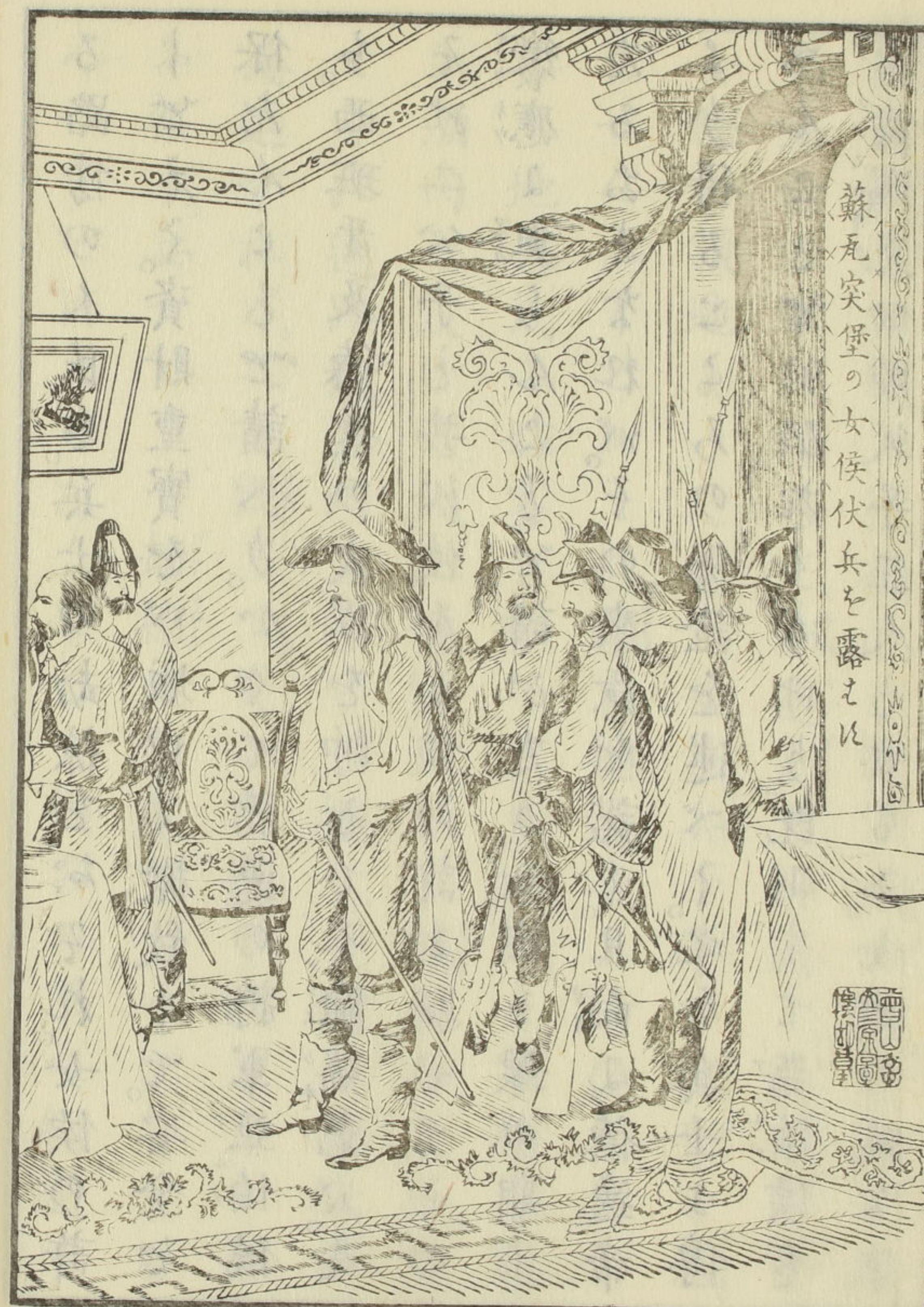
婦
女
鑑
卷之六



〇二七

宮内省藏

蘇瓦突堡の女侯伏兵を露す



蘇瓦突堡の女侯伏兵を露す

西川
大藏
印

宮内省藏

ぬ。それ坐や、定まるの時。果して兵士の無狀を女侯に報ずる者ありけむ。女侯之を聞き、大いに其信義を破るを憤れども。陽りてねもておあらさず。陰にお近臣小命トて兵器を執ら。の。城門を固鎖して後徐にお亞伯侯の前に至り。兵士の無狀と。帝命を蔑如する此太一を詰る。よ。亞伯侯等却てこれを嘲りて曰く。是等の事ハ兵士の常にして。凡三軍此經過するところ。多少の損害と被らざるハあらざるべし。たえて異むのいろなけれむ。女侯容を正して曰く。果し

て貴客等が言ふところの如くならむ。わき自らこれ小處する此道あるべし。わが不幸の人民をして。その正理を立るを得しめん。い他なし。君等將官の一命を獲て。兵士を掠奪するところの獸畜の價お充んぬ。吾天を以てこれお保證人となさん。とて。やがて暗號を示しけむ。忽ち劍戟を執るもの數十人。室中にいりて。賓客の背よ列し。之を擁して立てり。一室の中肅然として聲ふく。殺氣充溢せり。亞伯侯大いに愕き色を變じ。心を竭して女侯の怒りを宥め。急ぎ號令

好女録 卷之六 二五八 宮内省

を書きて。兵士の亂暴を制し。その掠奪する所の
獸畜をば。悉く本主よ返さしめき。

佛蘭格林の夫人

英國小て有名なる航海者佛蘭格林の夫人ハ。行
方知せざる夫の踪跡を尋ね得。其功よよりて。地
理會社より發明賞牌を受たり。そハ夫佛蘭格林
從前絶て人の經過せざりし北氷洋を究め。人の
あらざるを發見せんとなれも。發程せし
後。年月を経て。此れおどづきなきをば。夫人ハ剛
膽よも夫の存亡を問はらぬをめとなれも。ひた

ち。百折たおまほす。氷海を涉り。冰山を踰え。あまね
く。此れあとをたづねんとめて。竟よその素志を
遂げ。この賞をえざるなり。その時馬知孫といふ
もの、演説よ曰く。たのれ夫人佛蘭格林と友た
たるおといと久し。夫人も天賦の英才智徳あり
て。はよ勇偉の氣象をたもてり。その夫の踪跡を
索むるも。十二年の久しきを經。此間幾回とな
く失敗せし事あるも。おまほ耐へのび。最後お
フラックスといへる船よ乗りて發程し。危険を侵
し。遂よ二個の確證を得て齎らし歸せり。その

一ハ佛蘭格林フランドリン。従前航海者の未だ至らざる遠海をこえた里一證。一を北西の海程を新イグアと查出して死したるの證なり。かゝる確證をうる事。たゞろげふても思ひもよらず。こゝを夫人貞操節烈の精神より。夫の爲に身命を致したる此効果にして。類希タビヒふる功績イサナなきべし。これたふとに賞牌を。かふらば佛蘭格林の寡婦ウツメに屬すべきものにて。英國人民の喜で贈與するところなり。と述べたり。これりて其英烈なるを志るべし。

老婆龜

徳川幕府治世のころの事なりとあり。日毎に京の市中よりいでり。人の門よりたち物乞ふ老婆カメありけり。人これを牢谷ラウヤの龜婆カメバとよべり。ある日三條室町の道上サヤふて。財囊サイフを拾ひける。そがひもだふところ。傍カキの家よりおき。これを托し。こゝにたづねる人の何らむよ。あたへとまへ。とていひゆるんとす。いへ主あるたゞしくひきとゞめていひける。まふはど煩イライしき事あり。まゝ家業の違イナもあるねば。えこそうけがふまどけきといふ。龜い

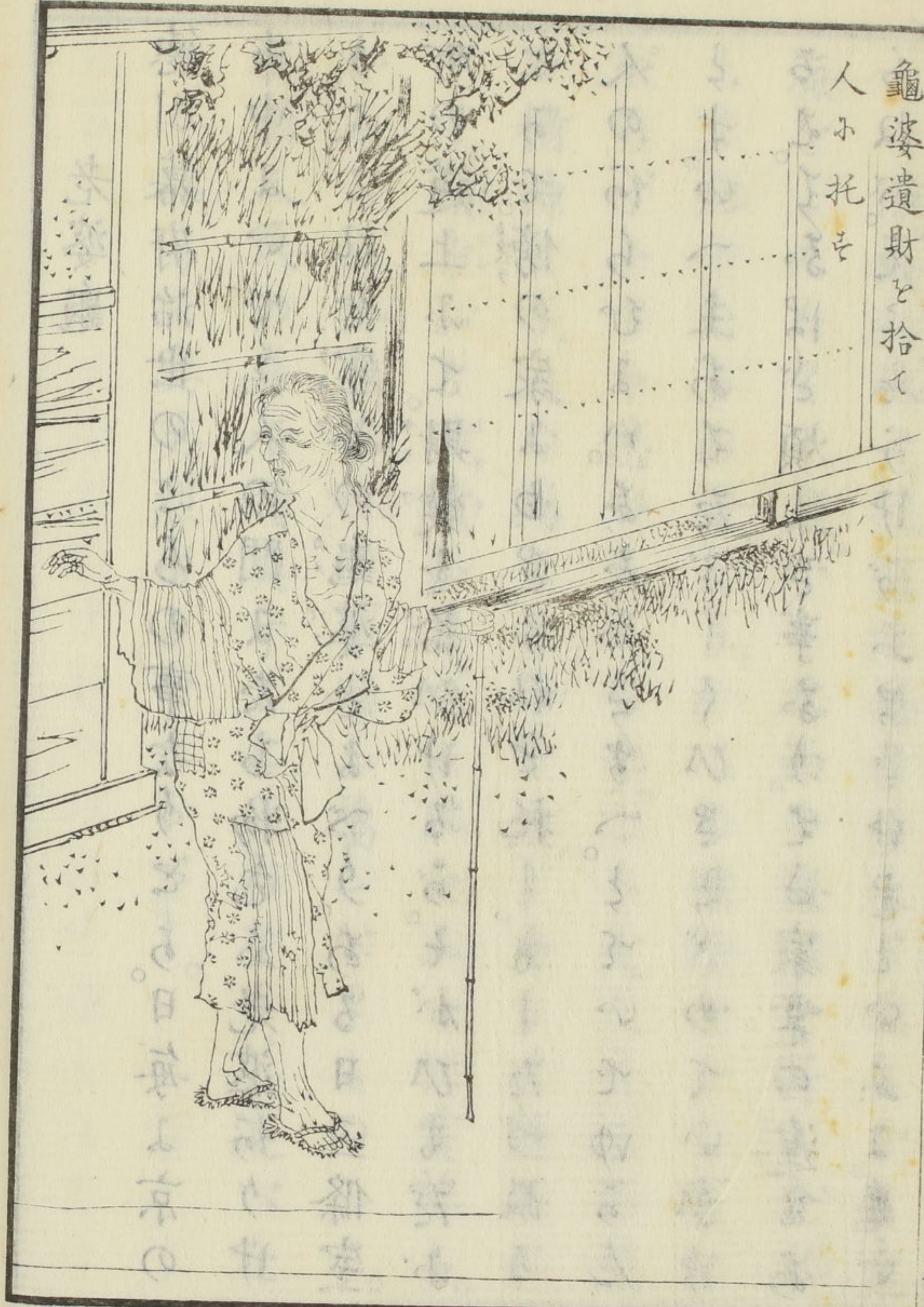
婦
女
鏡
老
之
六
〇
三
十
三
宮
内
省
藏



楓湖

婦
女
鏡
老
之
六
〇
三
十
三
宮
内
省
藏

龜
婆
遺
財
と
拾
て
人
小
托
そ



もく。こいあぢきなき事いふ人あふ。たとりたる人ふなりかたりても見たまへ。いくはく此うれへぞや。こそあじかりたきて。そ此人のいでんをまさん。何むかりの勞あらんと。辭コトバ少シクナく理コトワを解トクきしかむ。いへ主これふちてうけむひし。日ならむして。その物主たづね來りし。あは。たづちふらむ。成スいだし與ユふるふ。よろらびて金壹兩をむ。ひろひえし。そのし報いたし。とて托せしかむ。何づあり置て。そ此後龜の道すぐるをこめ。よびてそのよしをつげ。これを與ふるに。龜いもく。

固より報金をえんとおもむ。いあて人よ托をべき。財囊をそ此主よわたさねし。うへち。それふてよしとく。口をさみけるち。そのもたぬたもと。いあらしゆめをみ。あくとそのま。い下ゆきぬ。かゝるいといやし。きそのなれど。そのころるさし。の潔白なるふと。貴人高位の人よもはぢすといふべし。

楚野辯女

楚野の辯女を。昭氏の妻なり。鄭の簡公。國の大夫を。荆の國へ聘禮ヘイレイふ遣ツはしけり。路いと狭きとこ

ろを過ぎけるに。婦人の乗せる車もゆきあひて。
 あひさくるおと何とせず。轂もふきて大夫の車
 の軸を折りぬ。大夫いよく怒り。顔色をかへく婦
 人を執へ。之を鞭うたんとせり。婦人愕く氣色も
 なく。大夫よむらひて曰く。妾さく君子の怒りを
 遷さず。過を貳たびせむといへり。いま路せむに
 ところふて。妾も車さくるふよしくなく。進退谷ま
 せり。さるど大夫の僕。いさゝかもころせむ。車
 を行りしかど。さてこそ此過ちと來して。大夫の
 車を壊せるなれ。さるどかへりて過を妾も責む。

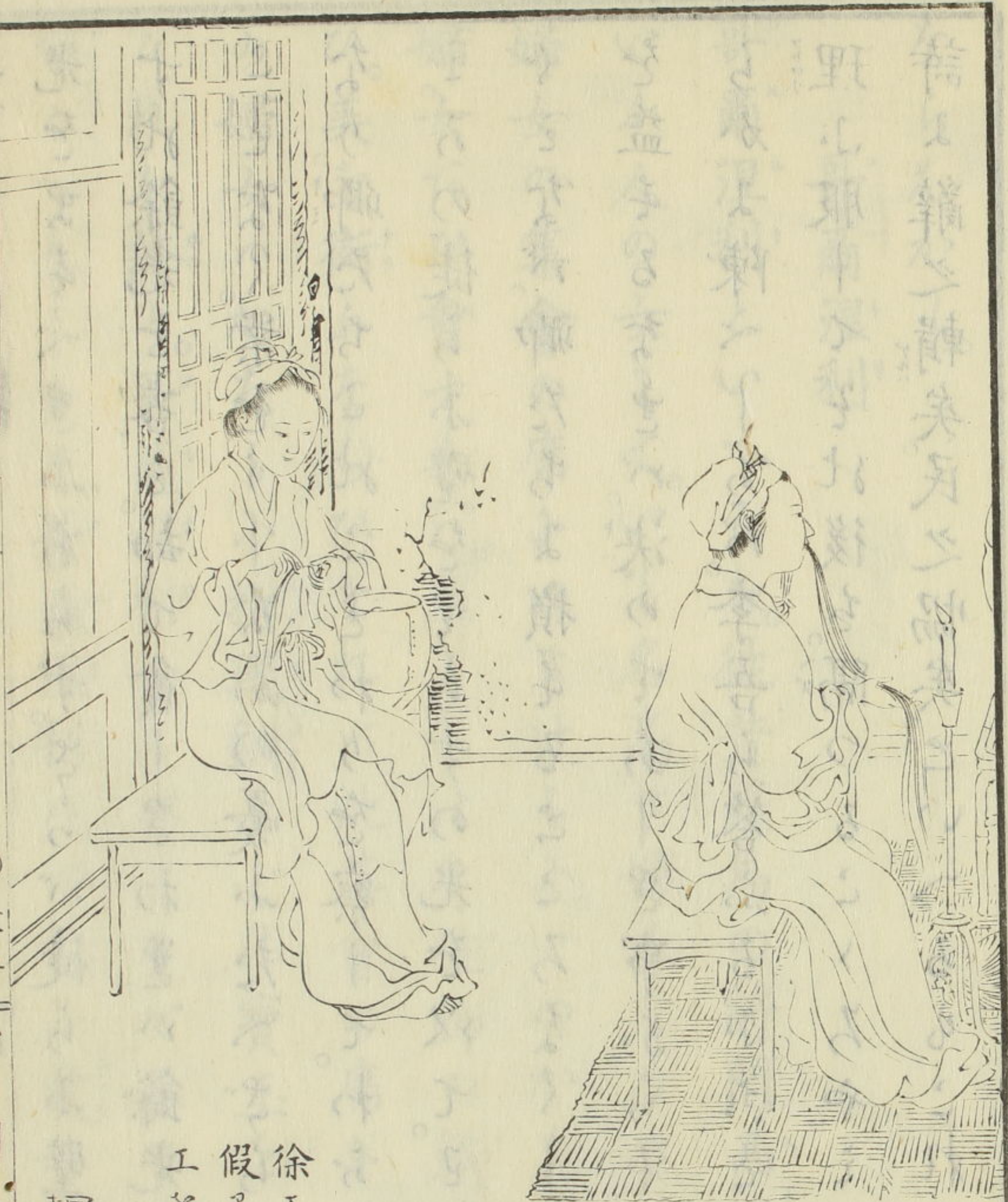
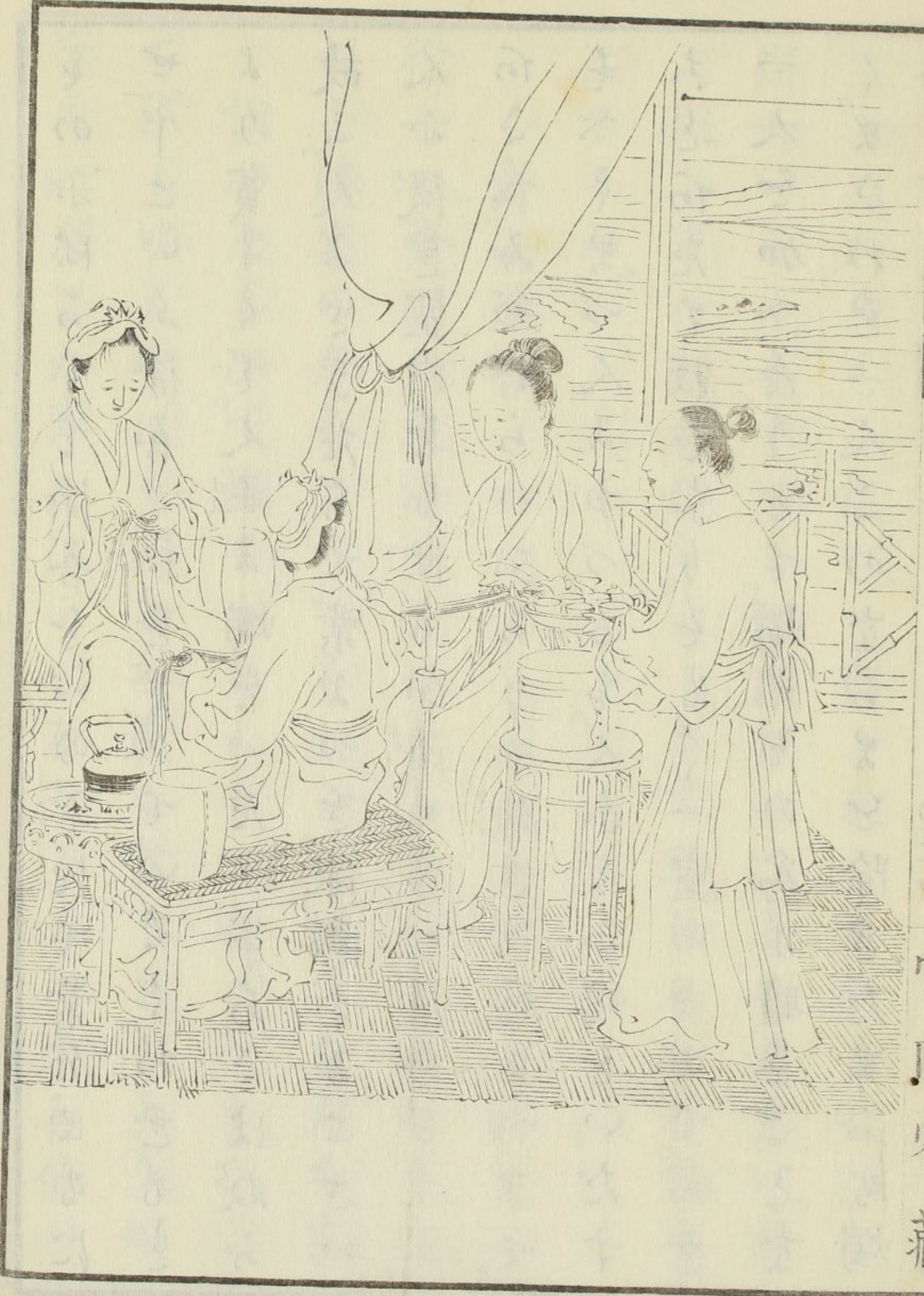
豈怒を遷すおあらざらむや。鰥寡をも侮るおと
 なく。高明をも畏むよといへり。今君、鄭の大夫お
 して。これ職分をもかへりせず。怒を遷し過を貳
 へ。僕を宥めて。かへつゝかよわき妾をさらへ。撻
 たんとす。豈鰥寡をも侮らずといふおおひ侍
 らんや。妾鞭撻をいさふおあらば。大夫の篤行お
 悖らんことを惜むなり。と理あきららるお陳べけ
 る。大夫大に慙ちて。答ふるおと何とせず。遂も
 これを釋し。さて卿をいふなる人よかと問ふお。
 楚野よすまひさる鄙しさを此なるよを答ふ。

さうらばたのき小従ひて。鄭小來らぶやといへど。辯女いそく。妾すでよ昭氏といへる夫あきば。君よ従ふ事のかかひがうし。とて車をちやめてをざさりぬ。


齊女徐吾

徐吾い。齊國の東海のやとりおすむ貧婦なり。つね小隣家の李吾といへる女。その他の友だちなど相かたらひて。燭をもちよりて。夜々亭うむこと残しけり。中にも徐吾を最も貧しきより。燭をえいださぬ事たびあさなりしるば。李吾他の

をの小はありて。徐吾をバのぞ起て。業をともにせトといふ。徐吾これをきいていそく。わきもとより貧しくて。人並よ燭をいだす事あさはぬ。故よ。人よさきだちて業よつぎ。休息するときい人小後。室内をもはらひ清め。席を設けて人よ何さへ。みづからいひありも。疎き下席よつぎて。まべくまづ人よ申づるを。人おと小燭をいだす。おと何たもねむあり。そもく一室の中よて。わき一人を加へたりとて。燭光その為小暗きことな。く。まよわき一人このなるまを。除きたまふも。燭



徐吾燭と
假して女
工と勤る

楓湖


光をまきべき小あらず。さらば徒ら小壁をてら
す此餘光を吝コソ。却て貪コソしきわきハ餘光を蒙る
ことなく。業をうコソなるふの憂小たへざらコソひる
なり。卿キミたち此ことわりを察して。わぶ志を憚
こ。あの徒ら小壁をてらすの光を以て。これよめ
ぐコソなば。卿キミたち小損コソするところなくして。われ
を益コソするなきば。決キめてあコソしき事コソふらト。と辭コソ和
らコソかコソ陳べコソあコソば。李吾ら答ふる小おとコソばなく。
理コソ小服して。此後を隔コソつることコソるやコソ小けり。
詩コソよ。辭コソ之輯コソ矣。民之協コソ矣。といへるもこれらの謂

ならんか。

哥爾涅利

哥爾涅利といへるも。往昔羅馬の將門西比揚スレビオンと
いふ人の女コソて。いと名高き婦人なりき。ある時
婦女の集會の席コソ小ゆさける小。いづかたコソても。
婦女コソ何コソひ會コソすコソむコソ。互コソよコソ此身粧飾サツレヨクの綺羅キヲと競キ
ひ。美を衒テラふコソならコソひなコソれコソば。此集會の席コソても。他
の婦女コソハかたコソと小指環釧ユビワリヒタキなどコソ此寶玉コソを示コソて。
これを誇カウり。哥爾涅利コソも亦コソこコソをコソと示コソさんコソおと
とコソへりコソあコソむ。哥爾涅利コソハつねコソ小愛ウツクしコソむとこ

哥爾涅利幼兒を
率ゐて會席に入る



〇三十七

會山寺
三原圖
繪

ろのどさおごどもを呼び。これを指さして曰く。これ即ちわが身の粧飾ふて。寶玉も異あらねば。ことみまもつゝのいとひけるよ。はとめ人よ誇りしもの。を慚ぢれをれけり。

命屈維爾の女侯

命屈維爾の女侯。かつく法蘭西王十四世路易王。不請願の事ありて。用ゐられぬを怒り。王を罵詈しけり。此時を聞くともの。唯一人ありし。も。其人の言を慎まざるより。遂小王も洩れ聞えけり。よりて王、女侯の弟工得公を召て。そ此實否を

糾されける小。公を其事かふらず虚ふして。實事ならざるべきのよを陳ぶ。王やおて公も命。姉の家不到りて之を糾さしむ。公命を奉きて親ら女侯の家小いより。此事ある小ととふ小。女侯の少るも包と匿をとおとなく。實を以て告げしか。公を禍の女侯の身小及むんとを恐る。密かに女侯小説きて心をもく。いま實を以て之を王に告げしか。必災厄も罹るべし。はと予さる小王小對ふる小誣言なるべしといへり。さるを今女侯の言の如くあらば。自ら前言の詐りを許くも似

たり。姑くその過ちを藏して。身の災厄を免きた
 まへ。おき機變の處まる此道なりと。徹夜こも
 を悉して説き示すも。女侯終ふその言も導かず。
 あついで公を予をしてその罪を累ねしむる
 なり。予と王小訴ふるもの。固より過なれおら
 ねども。無實を以て人を誣ふるおあらざれば。之
 を讒者といふべからば。さると却て吾非を覆え
 んとて。人を罪小陥いる。お忍びんやといひく。
 親ら王宮に詣り。王よ見えてその罪を自首しけ
 り。かゝりけむ。王を女侯の罪をとらざるのと

ならば。却てそれ心の直ふるを嘉みし。何つくお
 れお賞與せらむけり。
 綿多嫩
 貴女綿多嫩いも。と度阿比尼といふ者の孫よて。
 斯加論といへる詩人の妻なりし。夫身まかり
 て後。法蘭西王第十四世路易の諸子の保母とな
 り。よくおまを鞠育せしむ。遂小王の寵姫とな
 り。されば頓に富貴を得て。萬の事心の欲する
 まゝなまきども。おまを為小倨傲の念を萌さず。常
 おその身微賤なりしほどの事と忘むして。之

を念ひ。こまをねとふおとふ。ますく陰徳を積ま
 んおとと欲したりき。何る日。來客數人ありて。面
 謁をこへり時。其坐お一人の老人ありて。恭く
 綿多嫩お謁し。謂りけるい。予い夫人お別せよ
 り。己よ四十年の間。たえて何ひ見ざまば。夫人お
 い必予をば忘まてたまひはらん。されどなほ
 記憶したまへりや。夫人曾て島中より歸り來り
 て。魯施爾の學校お詣り。施物を乞まれしとき。予
 を當時そ此學校の教員おて何りき。されば予い
 施與を行ふの時お當り。夫人の衆お抽て。貴顯

の相何るお愕けり。夫人もまよ其施與を受ると
 慙る此色あまし可ば。予てしておすく慈惠の念
 慮を深からしめたり。とかさりいでけまば。夫人
 喜て答へて曰く。實よ然まなり。其時吾をして。
 衆窮民と群をなまの耻を避けしめ。施物を吾家
 よ餽り。且施物の多からざるを憾むと云ひしを。
 即ち君なりまや。君い吾が爲よ殊更お勞と厭ま
 ず。一おち吾よ施し。二よい吾をして辱を避るお
 とを得しめたり。あまれ今吾。君が爲よいある
 報酬をかなまべきといへば。かの老人今ハ一村

落の學校の教師なりけむ。いゝで夫人の紹介
 小よりて。古^{キコ}勒^レといふ僧官よて。一村内を管轄し。
 生死婚姻等の事小與かる職を獲んと請へり。さ
 れど夫人も自ら其職を命ずるの權なく。また
 此老人の果して其任に堪ふべきや。否やをも知
 悉せざれむ。此事をばやどよく辭して。これに金
 五百圓を與へ。以後年々同額の金を何たへんこ
 とと約して。厚く舊恩を酬いたりき。なべて此人
 情として。微賤より富貴榮達をうる小至りしも
 のを。昔日の寒微をば忘るゝ小あらざれども。お

不^フかた^イ他人の己が舊時のありさまを謂るを。
 忌み憎むものなるを。綿^{ワタ}多^タ嫩^ニい。衆人の前小てれ
 の色の舊時をいひいでらるゝも。こゝを憎^ニ忌
 まざるのとならず。大金を與へて舊恩を酬い
 ぬ。類^{タガヒ}稀^ヒあるおとどぞいふべき。

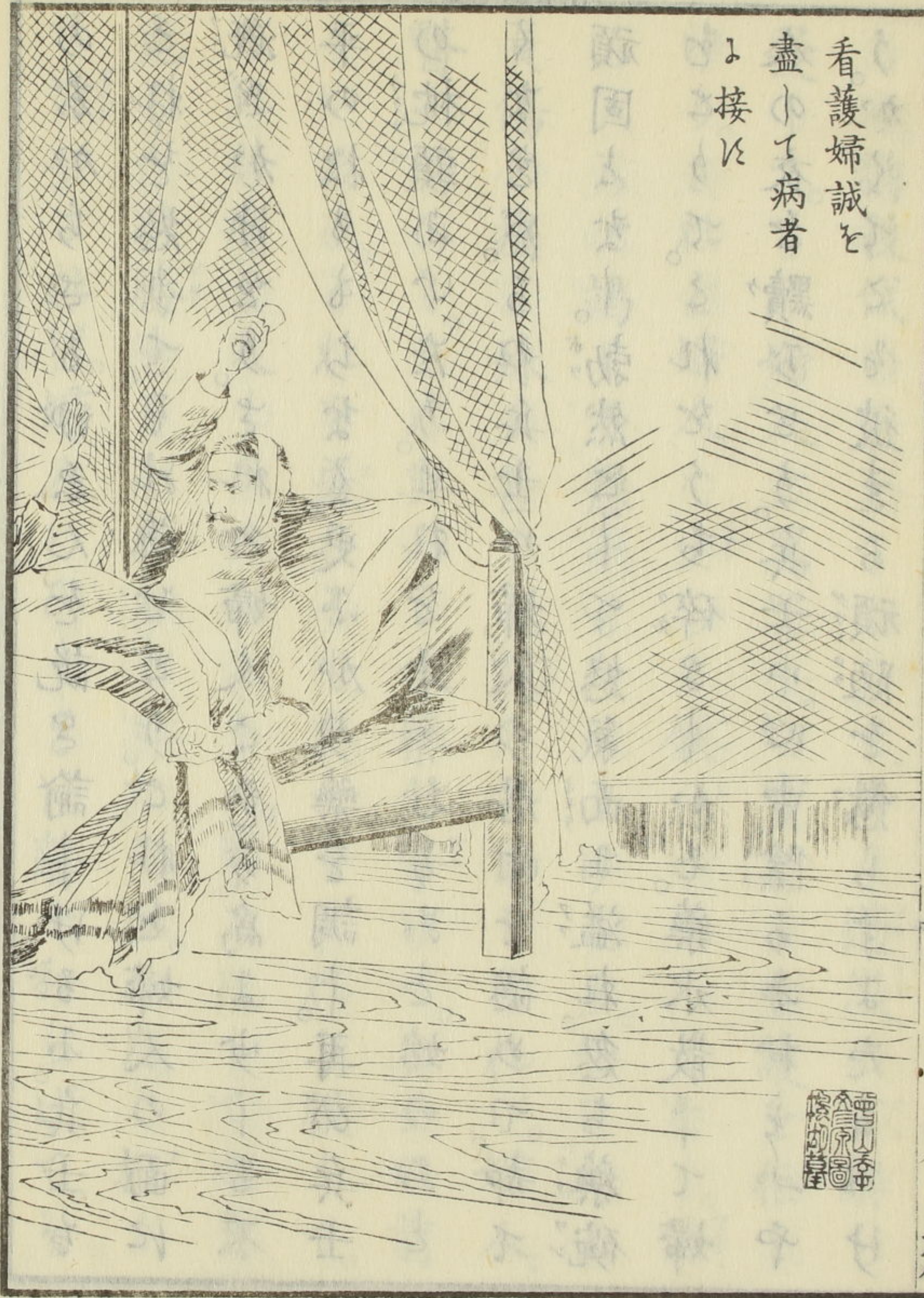
仁惠婦女社の看護人

耶蘇教師宛^{ゲンサン}三得保羅^{ドボ}といふ人の創立せし。仁惠
 婦女社小給事する。一婦人ありけり。劇^{ゲキ}しきたり
 かひありし後。一人の兵士の重傷を被りて。危篤
 の容體あるを看護しけり。あの兵士を病牀ふあ

るも。猶殺伐の氣をさまらで。時々過激の言辭を發して。あは婦人を罵詈訛。切實なる看護を拒みけり。されど婦人の少あも厭忌するおとなく。倍おろそを竭して懇小いたはりける。一日兵士負傷の痛と殊よ甚しく。悶え苦いとければ。婦人醫小請ひく。そは與ふる水薬を撃げて。兵士の前みいたり。これを羞むるも。兵士をこれを服して。そは苦痛を久しうせんよりい。寧ろ死して之を免る。此勝まる小志あどとねもひ。かたく拒みて肯ぜざれば。婦人のひとときは辭を和らげて。そ

の志からざるゆゑんを説き諭しける。兵士をこれを怒りて。そは薬ととり。これを婦人の面に漑ぎかけをり。されど婦人こをが爲よ少くも不平のねももちなく。更小かの薬を調ト。再び兵士の枕頭おいたり。これをすゝむるおと始のおとくなまひ。あは兵士の婦人の忍耐を認めて。却て頑固となし。勃然として怒氣面よ溢れ。忽ち薬碗をとりて。これをうち碎きかむ。薬水散トて婦人の衣を黷おせり。兵士の心中陰らおおとよやう。かくてこそ彼を頑陋を懲らすよたるべけ

看護婦誠を
盡して病者
に接し



曹山香
大正
癸卯
繪



せとおもへりし。婦人のなや初の如く薬をと
とのへ。懇よすゝめていさく。とくこ此薬を服し
たまへ。いざめしたまへ。必な否びたまひそとい
ふ。兵士とトめてそ此誠意小感ト。怒氣忽ち小
消滅し。涙を流していひける也。何それ汝をよお
らす神使なるべし。さるをおろかよもいあり辱
ありめし。わが過なり。とかつなきあり謝して。
遂小水薬をとりてあゝろよく服したりとぞ。柔
よく剛よ克つとも。かゝる婦人をやいふべうらん。
加馬馬兒

加馬馬兒也。三維斯の王里何里何の妃なり。一千
八百二十年小。基督教この島よ入る小及びて。島
中の婦女。おやかたし舊來奉せし所の多神教を
廢てし之小歸依せり。加馬馬兒も深く基督教を
信じて學問小志ざし。片時も怠らで勉強せしあ
ぞ。おむしのはど小學力大よ進歩せり。かゝり
あむ。夫王を諫めて。從來多妻を蓄ふるの陋習と
破り。遂よ之を廢せしめけり。かくて一千八百二
十三年の秋のころ。王里何里何英國よ如き。それ
より合衆國よ到らんとおもひだちて。加馬馬兒

如女鑑 卷之六 宮内省藏

をも伴ひて合諾耳府をいでたつ時。國民舉りて別を惜とけまば。加馬馬兒も海邊よたちて。國民等が離別の情をねもひやり、涙おらきてたすまらば。はてし何らねが袂を分ちて。やぶて船に乗る小臨と。訣別の歌を作りけり。その歌よ曰く。何れつちみまばあそれなり。海山みまばあそれあり。何れまき人々わまひ今。親しき友よたちわられ。まきし海山あとおまし。はるけき國小かどでまと。纜とまてとぎいでん。あそれらの國この家也。とばつ祖より傳へと。わき等が國どわあ

家ぞ。この家國をまばしだお。ねきてまの申かんくまたとふ。わられあゆあんわあるとも。この國民とゆあでわまきん。とうたひをはりて。祝砲の響と共ふ。浪をけたて、ゆく船を。何とあらなるとぞなりになる。あまきこそ永きわあまきとは。後ふぞねもひくらまける。日數へく王及加馬馬兒を。恙なく倫敦府よ達し。初のかどい衣冠態度の異なるぶ爲ふ。みる人之を何やと。あ。間もなく時好の衣服を製して着用しけまば。加馬馬兒の天稟秀美の婦女なまきば。おのづから后妃の風姿備

四十五

そりて。倫敦府の縉紳貴女も。其衣服頭飾を加馬馬兒マール小擬オウへ。これを製するなど。その聞えいと高し。かゝりけき。日々王侯貴紳の饗筵キヤウエン小招請せられて。それ尊敬をうくるおといと何つかりき。かくて。かく小至り。風土人情を視察せし。ぼど小寒暖不同の地。住なきぬ身なき。王里何里何ホハ。はあらず麻疹毒マシンドク小感染して惱めり。小。ぼどなく病勢急りてや。快復の徴あり。妃加馬馬兒カママル小傳染して。殆ど一命も危あ。里ければ。かたよ。歎き悲しむことかぎりなく。況し

て萬里の異郷小何りて。朋友親戚の六き。慰ナグサむる者も少なく。且前途の望を屬すべき千金も。換カへがたき身小何き。よそのさる目もあそれなり。かく悲痛の中。小加馬馬兒カママルハ。王小先ちて身まかりぬ。時小齡二十六歳。よて盛りの花を散ら。あしなき。こきより王里何里何ホの病重きと加へて。間もなく。これも身まかりけり。と。おむべし。この秀才の國王夫妻。いま。ば。の齡を假さ。布哇國民の幸福。これ小過ぎず。文化小赴くべかり。と。歎きても。なほあまり何り。

婦女鑑卷六終

婦女鑑編纂氏名

宮内省三等出仕文學御用挂

西村茂樹

編纂

宮内省文學御用挂

山田安榮

校勘

宮内省文學御用挂

加部巖夫

修文

宮内省文學部用紙
味膳兼夫
新文

宮内省文學部用紙
山田安泰
林博

宮内省文學部用紙
西林茂樹
藤原

御大藏書院藏書

明治二十年七月二十一日版權屆

同
年同月
出版

神戶書林
吉川半六

宮内省藏版

宮内省藏

御用書林 吉川半七

同

羊同月

出

同廿二十廿廿月二十一日

